

思い出を用いた療養中患者間のコミュニケーション支援

木原 崇博 仲谷 善雄

立命館大学 情報理工学部

1. はじめに

人間は生きていく中で様々な危険と隣り合わせで生活している。年齢を問わず、病気や不慮の事故のために長期入院を強いられた患者にとって、今までの生活と全く違った生活を送るのは多くのストレスを感じる。

長期入院の療養者は、入院という現状や病室という無機質な空間において、普段以上の孤独感や喪失感を抱えている場合が多い。また、生活環境が大きく変化した状況下に置かれると、気持ちが落ち込んだり、孤独感を感じたり、さらには生きる希望を失ってしまう場合もありうる。高齢者の中には「死にたい」や、「家族から見放された」と感じてしまう人もいる。

このような負の感情を救うのがコミュニケーションである。同じような境遇にある患者どうしが知り合い、悩みを共有することは、精神的な負担を軽減するのに有効である。本研究では、療養中の患者を対象として、他者との出会いを促進するため、担当となった看護師や廊下ですれ違う他の療養者との間でコミュニケーションが発生するように、自己紹介の端緒を開く情報提供を行う。特に相手と共通する話題、例えば思い出などをシステムが見つけ出し、相互に思い出を語り合うきっかけを支援する。このような支援によって、療養者と看護師、他の療養者、医師との間で相互理解が深まり、病院内の良好な人間関係を築く支援となりうると期待される。

2. 関連システムと研究動向

2.1 語り(ナラティブ)のアプローチについて

患者の語りにおける医療現場の取り組みとして、医師と患者の対話に基づく医学の概念などがある。ここで使われている「患者の語り」という言葉は、主として「患者の闘病体験」のことを指す。関連する取り組みとして「健康と病の経験」データベースである DIPEX Japan や

Communication Support System among the Patients during Treatment by using Fond Memories
Takahiro Kihara and Yoshio Nakatani
College of Information Science and Engineering,
Ritsumeikan University

Life Palette がある。これらは様々な闘病体験が「集合知」となることで、同じ病気で苦しんでいる人への社会支援としての活用が期待される。また、語ることで心の浄化作用としてのカタルシス効果[1]も期待できる。

2.2 思い出コミュニケーション

「思い出」は自分のために思い出すだけでなく、他者とのコミュニケーションに利用される。思い出持つコミュニケーション機能を山下、野島 [2]は「思い出コミュニケーション」と名付けている。思い出想起のトリガーとして写真を用いた取り組みに Photologue Viewer[3]や電子ミニアルバムなどがある。

3. システム概要

本研究では患者の語りを「闘病体験記」という狭義の意味ではなく、過去の「思い出」を語りの内容として考える。

患者を中心とする取り組みは多いが、患者同士を直接繋ぐ試みは行われていない。

病院や施設といった局所的空間では、同じ病を患っていたり、同じ悩みを抱えていたり、境遇の近い者が集まっている。そうした人々が廊下や病室での出会いの場において、会話のきっかけとなるように相手と何らかの共通がある思い出を提示するシステムを提案する。(図1)

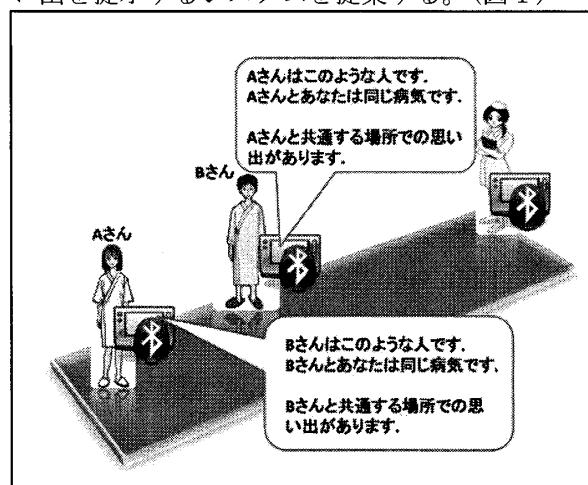


図1 システム利用のイメージ図

思い出の提示と同時に自己紹介として個人情報の提示も行う。日本人は、定型的なあいさつ言葉を交わすことから初対面会話が開始される。また、初対面会話においては自分の仕事、趣味、家庭生活など公的自己の開示に留まる。過去の経験や、自分や他人に対する気持などの私的自己は相手をよほど信頼している場合でなければ、普通は相手に表明しない[4]。こうした知見から、自己の提示と同時に「はじめまして」といったあいさつやその相手と何回出会ったのか、以前いつ出会ったのか、相手と何の共通があったのかなどをシステムがさりげなく提示することで、出会った相手との会話のきっかけと信頼度を徐々に獲得できることが期待される。

4. システム構成

第 3 章で提案したシステムを Windows PC 上に実装した。

4.1 開発環境

本システムは開発言語に Java を用いて実装した。これはモバイル・アプリケーションにおける信頼や拡張性が高いためである。また、思い出を情報として格納するために PostgreSQL をデータベースに用いた。さらに、相手を認識するために 2.45GHz、最大 3Mbps の速度で通信を行なうことができる Bluetooth を用いた。

4.2 システム

人間は情報の 8~9 割が視覚によるものであると言われている。したがって、写真や思い出の品を見て思い出を振り返ることが有効と考えられる。本研究では一枚の写真に付随する様々なメタデータから最低限必要な下記の 3 つに絞って思い出の提示を行う。

- ① 撮影時の日付や時間
- ② 撮影した場所
- ③ イベント内容

登録画面で個人情報や過去の思い出を登録し終えたのち、検索画面の「検索開始」ボタンを押すことで、システムはユーザの周辺に存在する Bluetooth デバイスを、Bluetooth アドレスを取得することで検知する。登録の際に個々のデバイスが持つ Bluetooth アドレスを自動的に検出し、データベースへ ID として登録できるようにしている。

登録の際にはその人が患っている病名も登録してもらう。しかし、ユーザによっては相手の病名を知りたくないし、自分の病名も知られたくないと感じる人は少なくない。そこで、検索前に各データの公開可否の設定を行うことがで

きるようにしている。設定画面では、相手ユーザの出身地、生年月日、趣味、そして病名などのチェックボックスを設け、検索時に表示するかどうかの設定を行える機能を備えている。

図 2 に検索後の実行結果の表示例を示す。

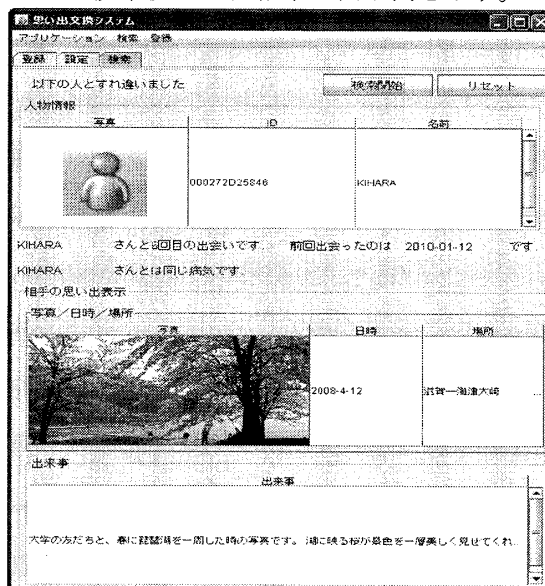


図 2 システムの画面表示例

4.2 あとがき

今回のシステムでは、病院や施設内において長期療養中の患者を対象とした思い出コミュニケーションシステムを提案し、思い出からの会話によって医療現場内環境の向上を目指した。しかし、実際にこのシステムを使用してもらうにはセキュリティやモバイル端末などの機器の小型化といった問題が残っている。

ユーザがより適した情報を取得するために検索条件を充実させ、実用的なシステムとしていきたい。

参考文献

- [1] 松原達哉、楡木満生、澤田富雄、宮城まり子：心のケアのためのカウンセリング大事典、p.249、培風館、2005
- [2] 山下清美、野島久雄：思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバムの提案、ヒューマンインタフェースシンポジウム'01 論文集、pp.261-264、2001
- [3] 山下清美、野島久雄：写真の大切さに基づいたデジタル写真の整理法、日本認知科学会第 19 回大会、pp.194-195、2002
- [4] 張 瑜珊：台日女子大生による初対面会話の対象分析—初対面会話フレームの提案を目指して—、人間文化論叢 第 9 巻、2006